

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	佐藤 正伸
<p>主論文題目： 語彙ネットワークと英語知覚動詞の習得・指導研究</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本研究の目的は、日本人学習者における英語の基本動詞の習得状況を調べ、その有効な指導方法を提案するというものである。基本動詞は、中学校の段階で学ぶ基本的な語彙である。しかし、基本的であるということが直ちに簡単であるということにはならない (Nation, 2001)。「基本語を知っている」ということと「基本語力がある」ということは別問題である。</p> <p>そこで、本研究では、語彙研究の理論的枠組みを示した上で、習得研究を行い、日本人学習者が基本語を学ぶ上で何が問題かを明らかにし、その問題の原因を学習方略に求めた。より具体的には、「語彙力」を語彙内能力 (intra-lexical competence) と語彙間能力 (inter-lexical competence) の2つから構成されるものとして定義し、知覚動詞領域を取り上げ、大学生を対象に習得研究を行った。これまでの語彙習得研究では、語の多義性に注目したものが主流であったが、本研究では「語彙ネットワーク (lexical network)」という枠組みを採用した研究を行った。それによって、具体的にどこが学習困難であるかを明らかにすることができた。</p> <p>さらに、本研究では、基本語力の養成においてコア図式を使った指導法 (SBI: schema-based instruction) が、従来型の指導法 (TBI: translation-based instruction) に比べて、有効であるかどうかの効果研究を行った。結果としては、コア図式を用いた SBI は翻訳を用いた TBI と同等の効果は見られたものの、両者に統計的に有意水準の差を見出すことはできなかった。この研究は、単純にコア図式を使えば、生徒の語彙理解、そして語彙使用の力に寄与するというのではない、ということを示唆している。そこでどうして明確な効果が生まれなかったのかについて項目ごとに詳細な考察を行い、コア図式と事例との「フィット感」に影響を与える要因を明らかにした。</p> <p>コア図式の般化力は、図式を用例に適用させる際のフィット感に大きく依存しており、コア図式をどう提示すればよいかという問題がでてくる。本論文では、この図式提示の最適化の問題は、エクササイズの問題であると捉え、その上で、知覚動詞のエクササイズ論の素描を行い、語彙指導への示唆を与えた。</p> <p>キーワード：基本語力、知覚動詞、語彙ネットワーク、図式、エクササイズ論</p>			